

内容紹介

東京電力福島第一原発事故のため全村避難が決まり、無人のはずの福島県飯舘村に、1人で住み続ける宮司がいる。「宮司が神様のところを離れる訳にはいかない」と語る綿津見神社宮司の多田宏さんは、境内を除染し、神事を続ける。だが、避難先での定住を決めた氏子に地鎮祭を依頼されることも増えた。綿津見神社と多田さんは、原発事故ですべてが変わっていく村を見守っている。いつか、村に人が帰ってくる日を信じながら。

初出

朝日新聞 二〇一五年二月二十日～三月六日

※本文内の画像は、W E B用のものを転用しているため、解像度が低い場合がありますが、ご了承ください。

目 次

第1章 今年も静かな年明け

第2章 この人ら、どこへ？

第3章 神様は動けねえんだ

第4章 北陸から物資を運べ

第5章 悲しい「野生の王国」

第6章 あきらめた見守り隊

第7章 元の神社への「分霊」

第8章 祭りも神棚も縮んだ

第9章 地鎮祭に複雑な思い

第10章 母の急死に募る無念

第11章 焼け落ちた村の神社

第12章 オオカミの絵も焼失

第13章 樹齢100年のスギ伐採

第14章 見通し立たぬ賠償

第15章 厄払いも村の外で

第1章 今年も静かな年明け

2014年の大みそか。深夜に入り、福島県飯舘村は雪がしんと降り始めた。

道は見る見るうちに白くなり、中央線の位置さえ分からなくなった。

福島第一原発から放射能が降り注ぎ、11年5月に全村避難が始まった。

それから3年7カ月。

誰も住まない村は、静か過ぎる年末を迎えていた。

誰もいないはずの、村役場の北約3キロにある綿津見（わたつみ）神社は、拝殿や社務所に明かりがともっていた。

参道の石畳は雪が掃き清められ、左右に一对のかがり火が据えられた。

拝殿では、白衣を着た氏子らが大小様々なお札を神前に並べていた。

事前に祈禱（きとう）を申し込んだ参列者もポツリポツリと集まり始め、30人ほどになった。

日付が変われば新年最初の祭礼、歳旦祭（さいたんさい）だ。

宮司の多田宏（ただひろし）（67）は祭壇の脇に据えた太鼓を自ら打ち鳴らし、祭りの始まりを告げた。

全村避難から最初の正月、12年の参列者は5、6人だった。その周りを10人近い報道陣が囲んだ。

それから少しずつ、参列者が増えている。信仰心はまだ生きているな、と多田は思った。

「たかまがはらにかむづまります

すめらがむつ

いざなぎのおおかみ……」

神々の名を恭しく述べ、祝詞（のりと）を唱える。氏子らの住所や名前、祈願の内容を一つずつ読み上げた。「身体健全」「家内安全」「受験合格」と願い事は、ほかと変わらない。

1時間ほどで儀式が終わり、参列者がお札を受け取って帰ると、境内は急に静かになった。

次に参拝者が来て、お札を受けて帰ったのは午前7時過ぎだ。

「少し仮眠できました」

神社の元日は普通、暗いうちから初詣の人たちが列をつくってさい錢を投げ、柏手（かしわで）を打つ。

しかし、綿津見神社は震災後、そんな風景とは無縁になった。

多くの村民が避難する福島市からでも、山道を車で小一時間かかる。

いくら元旦でも、無人で真っ暗な村に帰るのは気がひけるらしい。

しかし、多田はあの日からずっと神社に住み続けている。

「宮司が神様のところを離れるわけにいかないでしょ」

第2章 この人ら、どこへ？

福島県飯館村の綿津見（わたつみ）神社は平安初期、807（大同2）年の創建と伝わる。

元は「くさ野（くさの）神社」で、村から約30キロ南東の太平洋岸にある浪江町のくさ野神社からご神体が勧請（かんじょう）されたのだという。

以来、飯館では村の中心部、「草野」の地と水の神としてあがめられてきた。

沿岸部とのつながりはその後も続く。戦国時代には、沿岸部から移った熊川（くまかわ）氏が氏神の八竜（はちりゅう）大明神もまつるようになった。

1870（明治3）年に名付けられた「綿津見」も、海の祭神のことだ。

飯館村は今でも、よく晴れた冬の日に山へ登ると、太平洋の水平線を見渡すことができる。

2011年3月11日の地震は、その海に津波を起こした。

宮司の多田宏（67）は社務所で事務を執っていた。建物に大きな損害はなかったが、家族全員が外へ飛び出した。

停電で、テレビもつかない。

「ちょっと様子見てくるわ」

神職として神社を手伝っていた、息子の仁彦（きみひこ）（43）が車に乗り込んだ。カーラジオがひっきりなしに伝えるニュースによれば、沿岸部はかなりの被害らしかった。

県道を進み、高低差450メートルの八木沢峠を下って南相馬市に入る。

瓦がずれ落ちている家屋が目立ち始めた。海岸に近づきたかったが、すでに警察の規制がかかっていた。

それでも、いくつかの神社を回ると、知り合いの神職たちが無事なことは確かめられた。

すっかり暗くなったころ、村へ戻ろうとした。県道がやけに混雑している。村の方へ村の方へと、ひっきりなしに車が通る。

見たことのないラッシュだ。

「この人ら、どこ行くんのだ？」

休憩しようと路肩へ車を止め、近くに止まっていた別の車のドライバーに声をかけた。

「なにかあったんですか？」

「原発。放射能が危ないんだと」

同じころ、村に残っている父も同じような話を耳にしていた。

村の被害を見て回っている消防団員がささやいた。

「宮司さん、逃げた方がいいよ」

福島第一原発が危ないらしい。

とにかく停電した村は不自由だ。

多田は仁彦と、福島市の小学校の避難所に車に向かう。そこで数日様子を見ようと思っていた。

第3章 神様は動けねえんだ

震災2日後の2011年3月13日、福島県飯舘村にある綿津見神社の宮司、多田宏（67）は妻（69）と母（92）を福島市の小学校の避難所から、市内に住む長女宅へ移した。

しかし、原発事故が収束する気配が感じられない。

さらに数日後、神社に戻り、村役場で借りた線量計で測てみると、屋内で毎時10マイクロシーベルトと出た。

「尋常ではないな」

3月23日。せめて母だけでも、と静岡の弟のところへ送り届けた。

多田は福島市に戻ると、長男の仁彦（43）らにこう切り出した。

「神社に戻るわ」

日本の古い神道は、人間をとりまくものすべてに神が宿ると考える。

綿津見神社も綿津見大神を始めとする9柱の神をまつが、その神々は村の山川草木に宿っている。具体的な姿や形はない。

仏教の寺ならば、祈りの対象である仏像をよそへ移しさえすれば、信仰をつなぐことができる。しかし、日本の神は土地に寄り添っている。

「放射能の影響がどうなるかわからないけど、とにかく神様は動けねえんだから」

多田の意志は固かった。

「せめて福島市から通うわけにはいかねえの？」

仁彦が提案したが、受け入れられなかった。

農業の盛んな飯舘村は、食料には困らない。しかし、物資が乏しくなり始めていることは事実だった。

ガソリンは1度に10リットルを確保するのがやっとで、ペットボトルの水も手に入りにくくなり始めていた。

「ミルクをつくるにも、安全な水がない。赤ん坊の調子が悪くて」と、訴える氏子もいた。

そんな村に父が戻るのだという。

仁彦は携帯電話でメールを打った。

「大変なことになってます。もし物資があるなら、取りに行きます。お金は出します」

送り先は、皇学館（こうがくかん）大学で神職になる勉強をしていた時の同級生。福井県護国神社（福井市）の禰宜（ねぎ）、宮川貴文（みやがわたくふみ）（43）だった。

仁彦は大学卒業後8年間、石川県白山市の白山比咩（しらやまひめ）神社で修行した。宮川ら北陸地域の若手神職とは神道青年会の行事で交流してもいた。

宮川へのメールはSOSの発信だった。

そのころすでに、北陸の若手神職たちは被災地へ支援物資を届けようと動き始めていた。

第4章 北陸から物資を運べ

「燃料がないんです」

2011年3月半ばだった。

富山県高岡市の有磯正（ありそしょう）八幡宮宮司、上田正宙（うえだまさひろ）（46）の元に、山形県で神職をしている友人から携帯電話のメールが送られてきた。

福島県飯舘村にある綿津見神社の神職、多田仁彦（43）が福井県護国神社の禰宜（ねぎ）、宮川貴文（43）に、物資がほしいとメールを送信したのとはほぼ同じころだ。

宮川から連絡を受けた上田は、北陸神道青年協議会のメンバーにメールや電話で呼びかけた。

「これは、俺たちが現場に行かなあかんわ」

北陸の若手神職らは、04年10月の新潟県中越地震、07年7月の新潟県中越沖地震と震度6強以上の災害で緊急支援に動いたことがあった。

その経験から、上田は今回の震災が起きてすぐ、こう思った。

「きっと神社に被災者が集まっているはずだ。神社に物資を運べば配ってもらえる」

なにより燃料が必要だ。中越の地震でも車が動かなくて困った。

その後北陸では、多くの神社がガソリンの携行缶をストックするようになった。上田のところも30個ほどが倉庫にあった。

ワゴン車が8台集められた。後は肝心の燃料をどう運ぶかだ。

消防署に相談してみると、富山市内の専門業者が協力してくれるかもしれないという。

さっそく業者を訪ねた。給油だけでなく、静電気による発火を防ぐアースの取り付けもしてくれた。

上田ら第1陣は3月20日、山形へ物資を届けた。

新潟から山形に入ったとたん、町も村も真っ暗に見えた。

「想像以上の大災害だぞ」

22日からは2日かけて盛岡市、宮城県石巻市、福島県郡山市へ。27～28日に二本松市、いわき市。その一部が飯舘にも届いた。

福島県に入るメンバーは、放射性物質の付着を防ぐ防護服を準備する余裕がなかった。仕方がないので、簡易のレインコートを着た。

物資の受け渡し場所に着いてみると、受け入れ側はみな普段着だ。上田はちょっと拍子抜けした。

北陸を出る前、仲間で決めたことがあった。

「まだ子どものいない人、子どもをもうける予定のある人は福島へ行かせない」

それが正しかったのか、間違っていたのかはわからない。

第5章 悲しい「野生の王国」

2011年4月22日、福島県飯舘村は計画的避難区域に指定され、5月15日には全村避難が本格化した。

それでも綿津見神社の宮司、多田宏（67）は神社を動かなかった。

拝殿で祈禱（きとう）をし、境内を掃き清める。日常はなにも変わらない。

「被曝（ひばく）するけど、神職だからな」

村は高線量の地域をのぞいて、通行は可能だ。しかし神社を訪ねてくる人は減った。

野生の猿が姿を見せるようになったのは、そのころからだ。

それまで、近くの農家に現れたという話は聞いたことがあったが、多田自身が目にすることはなかった。

「真っ赤な顔で木の枝に止まって。びっくりした」

1日に数十匹を見かけることもあった。

夜になるとイノシシ。暗い境内をノソノソと歩き回っているのに出くわすと、ドキッとする。

人間が消えたのだから、猿もイノシシも我が物顔だった。

「野生の王国だ。でも、エサになる作物をつくらなくなっちゃったんだから、悲しい王国だわな」

実は人間も困りものだ。

夜、突然インターホンが鳴る。出てみれば、警察官が立っている。警戒で巡回しているという。

神社だけ明かりがともっているの、不審に思われたらしい。

「失礼ですが、こちらの方ですか」

「宮司です」

「身分証明になるものはありますか」

神社にいる事情を説明し、運転免許証を示した。

その数日後、また別の警官がやってきた。

「失礼ですが」と同じやりとり。

「前に来た人にも説明したよ。引き継ぎはなかったの？」

2度とも地元の警官ではなく、他県からの応援だと言った。

その後はさすがに「不審者扱い」はなくなった。

神社をよそへ移せれば、こんな煩わしいことも放射能への不安もなくなるだろう。ただし、村全体の集団移転が前提だ。

神は土地に根付くから、めったに引っ越しはできない。

村は11年9月、除染計画を発表した。日常生活の場所は年間1ミリシーベルト以下を目標とし、住民の帰還を目指す内容だった。

多田はそれを頼りに、神社を守り続けている。

第6章 あきらめた見守り隊

2011年の初夏だった。

福島県飯舘村にある綿津見神社の宮司、多田宏（67）は、村山豊（むらやまゆたか）（67）ら氏子総代にある思いを話した。

「一日中神社にいてもなんだから、見守り隊に入っかな？」

正しくは「いいたて全村見守り隊」。

村内20の地域ごとにチームをつくり、24時間3交代、2人ひと組で集落の中を1軒ずつパトロールする。

震災から3カ月後の6月から活動を始めていた。隊員は交代で福島市などの避難先から通う。

高齢者が多いのは「若者が放射能の心配をするよりは」ということらしかった。

日当7千円、夜間の手当、交通費が出る。

お金はどうでもいい。でも、ひとりで神社にじっとしているのはあまりに寂しい。

寺院ならば檀家（だんか）が急に亡くなって葬儀に向かわねばならないこともあるが、神社の仕事にそれほど緊急のものはない。

誰もいない村内では、話し相手にも事欠いた。

見守り隊なら、同じ組に入る人と話ができる。神社の外に出れば気分も変わるだろう。

「入隊」は7月ごろだった。深夜の勤務もあったが、ひとりで神社にいる暮らしとは大違いだった。

放射能に汚染された村とはいえ、集落を回るのは気持ちが晴れた。

参加から数日後、所用で神社を訪ねてきた氏子がなにげなく言った。

「宮司さん、見守り隊に出てんだってな」

そのひと言に、多田はハッとした。

氏子は見ている。宮司が神社の仕事をおろそかにしているのではないかと。

結局、10日ほどやってみてやめた。宗教法人である神社から宮司として給与を得ているから、雇用保険の手続きも煩わしそうだった。

14年春から、見守り隊は深夜をのぞく2交代になった。今は約240人が参加している。

綿津見神社の地域は、朝番が午前5時半～午後1時、昼番が午後2時～9時。

氏子総代の村山は、朝番の時は福島市内の避難先を午前4時に出る。

1時間で村に着くが、少し早く出ないと、復興事業のダンプカーやトラックで混雑するからだ。

「結構大変な仕事。宮司さんは通勤の必要はないけど、やめておいてよかったと思うよ」

第7章 元の神社への「分霊」

2011年秋。

福島県飯舘村にある綿津見神社の宮司、多田宏（67）に、県神社庁から相談が持ちかけられた。

「ご分霊をお願いできませんか」

分霊とは、祭神を別の神社にもまつるようにすること。神は分身となっても元の神と同じと考えられる。

綿津見神社の分霊をまつるのは、浪江町請戸のくさ野（くさの）神社。

漁港のすぐそばにあり、震災の津波で町ごと流された。宮司ら3人が亡くなり、禰宜（ねぎ）が行方不明。

祭神も「どこへ行ったかわからない」状態となった。

それでも、横浜市に住んでいた宮司の娘を後継者として、再建することになった。

そもそも、綿津見神社の神は平安時代にくさ野神社から勧請された。それを分けて元のところへ、という提案だった。

県神社庁は、くさ野神社の復興を、被災した県内の神社すべての象徴ととらえた。

日本の神は本来、具体的な姿を持たない。人の姿をした神像がつくられた例もあるが、それは八百万（やおよろず）の神の中では例外的な存在だ。

姿なきご神体をどうやって分け、移すのか。ある神社の神を別の神社に分けることはよくあるが、元の神社への「帰還」というのは、そうそうあることではない。

「こうしなければだめっていう作法があるわけじゃないからねえ」

多田は県神社庁の用意した「御幣（ごへい）」に「ご神霊」を移すことにした。

それをくさ野神社に供えてお祭りをすれば、無事に分霊できる。

12年2月19日、くさ野神社の祭礼は執り行われた。

神社本庁、県神社庁の役員らも参列し、にぎやかなものだった。高さ50センチほどの小さな仮社殿を置き、復興を祈願した。

ただ、神社の周りは草むらで、大小の石碑がいくつも倒れたまま。津波に打ち抜かれて大きな穴が開いた住宅が、無残な姿をさらしている。

漁師たちがみこしを海に担ぎ出す勇壮な祭りや五穀豊穡（ごこくほうじょう）を祈る「田植踊（たうえおどり）」は、県内でも有名だ。

それを神社の境内で再び催せる時がいつ来るのか。

宮司が神社に住める日の見通しも立たない。年に1度の祭りは、隣の神社の神職が奉仕して町外の仮設住宅で営まれている。

「これからどうなるのかなあ」

綿津見神社の多田は、多くを語ろうとしない。

第8章 祭りも神棚も縮んだ

神社に祭りは欠かせない。

福島県飯舘村、綿津見神社の大祭は3年に1度、5月3、4日にある。春真っ盛りのころだ。

「綿津見神社」ののぼりを立て、陣笠に袴（かみしも）という侍姿の氏子を先頭に行列が練り歩く。

神社のある草野地区を出発し、村一円を回る時、宮司は正装で馬に乗り、みこしを誘導するのだった。

みこしは白木の社殿ふう。きらきらと派手に飾った一般的なみこしとは違う、素朴なものだ。

そのみこしが神社に戻ると、すげ笠をかぶった氏子らが「笠踊（おどり）」を踊って迎える。

ひと月も前から毎晩のように集会所に集まり、練習した。青年たちが太鼓で音頭をとる、陽気な踊りだ。

「昔はタルをたたいたものだった。八木節でやった年もあったな。あれはにぎやかだった」

氏子総代のひとり、村山豊（67）は懐かしむ。

大祭のない年の例祭は、震災から間もない2011年4月29日にあった。1日だけで規模もぐっと抑え、参列者は氏子総代ら約40人だった。

緋色（ひいろ）の衣装をまとった宮司の多田宏（67）が祝詞（のりと）を唱え、お祓（はら）いをした。行列や踊りはなかった。

その昔は「浜おり」という祭りもあった。阿武隈山地の懷にある飯館から30キロは離れた南相馬の浜まで、みこしを担ぎ下ろす。浜に着くとみこしを海につけ、清めたのだという。

多田が宮司になるころには途絶えていたが、みこしを担いだ若者たちが海辺の神社の一団とけんかして、相手のみこしを壊してくることもあったという。

震災の後、祭りの熱は冷えた。例祭の参列者は以前の半分、20～30人に減った。

氏子の神棚も小さくなった。

福島市内の借り上げ住宅に住む村山は、居間の片隅に高さ約30センチ、幅約10センチの神棚をまつ。綿津見神社で受けたお札を脇に立てかけた。

「ここくらいしか置くところがなくて。せっかくいただいたのに申しわけねえんだけどね」

飯館で酪農をしていたころは、母屋の中に幅1間ほどの神棚があった。市街地の狭い住宅でそんなしつらは無理だ。

2015年は大祭の年にあたる。ただ、村民が村に帰還できる見通しはたっていない。多田は思案する。

「盛大にとは……。主立った氏子にだけ集まってもらうことになるんじゃないか」

第9章 地鎮祭に複雑な思い

2014年11月のある日。

氏子の男性が1枚の紙を持って、綿津見神社に宮司の多田宏（67）を訪ねてきた。

祈禱（きとう）の依頼らしく、福島市内の住所や地鎮祭という文字が見えた。

避難先で自宅を新築するので、地鎮祭を頼みたいという申し出だった。

「どうかひとつ、よろしくお願いします」

頭を下げる氏子に、多田は淡々と答えた。

「はい、わかりました。では当日」

多田の心には複雑な思いが渦巻いた。

「これでまたひとり、村に戻らない人が増えるんだなあ」

飯舘村の全村避難が決まったのは11年4月。その年末には「2年後の帰還開始、5年後の全員帰村」を打ち出した。

一方で、本当に帰ることができるのか、と訝（いぶか）る村民はいる。

半信半疑で待っているより、村の外で新しい家を構えて落ち着いた方がいいと……。

村外の地鎮祭に呼ばれるようになったのは、明らかに震災後のことだ。それ以前は考えたこともない。

多田が今も神社に残っているのは神を守るためだけではない。

「氏子と村をつなぐ役になればなあ、と思ってるんだ」

村の自然を神とする神社が神職によって守られていれば、村に帰ろうという気持ちを住民が少しでも持ち続けてくれるのではないか。

しかし、地鎮祭を頼んでくる人は確実に村を離れていく。神社との縁も徐々に薄まっていくに違いない。

多田は時折、神社にやってくる氏子らとお茶のみ話をする。話題はたいてい村の将来のことだ。

「子どもがいる若い人は帰って来にくいべねえ」

「年寄りには住み慣れた村の方がいいから、帰ってくるかもしれないけどな」

「20年、30年先はどうなる？」

話はいつも堂々巡りだ。

震災前、多田は毎年11月半ばから氏子の家を訪ね歩いてきた。

正月を無事に迎えられるよう、年末の祈禱、大祓（おおはらえ）をする。

その数800。年末までに終わらせるには、この時期から回る必要があった。

それも今は途絶えている。

「忙しいけど、村の人らと話ができた。あんな時がもう一回来るかなあ」

第10章 母の急死に募る無念

2013年9月17日の夕刻。福島県飯舘村の綿津見神社にいた宮司、多田宏（67）の携帯電話が鳴った。妻（69）だった。

「大変だ。おばあちゃんがおかしい」

多田の母、徳子（とくこ）が急死したのだ。92歳だった。

多田はすぐ神社を車で出て、母たちが避難していた伊達市内の借り上げ住宅に向かった。

小一時間で到着すると、警察官数人が慌ただしく動き回っていた。

この日、徳子がかかりつけの病院で診察を受けていた。

医師から「健康ですね」とお墨付きをもらって帰ってきたばかり。機嫌良く、ひとりでトイレに入った、はずだった。

しかし、いつになっても出てこない。多田の妻が様子を見にいくと、すでに動かなくなっていた。

急性心筋梗塞（こうそく）だった。

救急車を呼んだが、変死として扱われ、警察が出動した。

警官は現場のトイレの検証をし、多田と妻から事情を聞いた。

すべてが終わろうとしていたとき、警官はファスナーのついた茶色い袋に徳子の遺体を入れて、屋外へ運んでいった。

「なんだか、モノみたいだな」

目の前で機械的に進められる手続きに、割り切れない思いを感じずにはいられなかった。

「検視はもうこりごりだ」

もし、神社の境内にある自宅での出来事だったらどうだろう。もう少し心静かだったのではないか。

原発事故がなければ、避難先の家族と別々に暮らすようなことにならなかったのに。

多田の息子、仁彦（きみひこ）（43）も、長引く避難生活に複雑な思いを抱えている。

震災後、父のすすめもあつて実家から20キロ離れた南相馬市の神社に勤めるようになった。ときどき飯舘村に帰ることはあるが、相馬市内に家を借り、結婚もした。

「やっぱり負い目感じるんですよ」

父は村に残って神社を守っているが、自分は村を避けているように見えないか。自分ひとりなら父のところへ駆けつけるのだが、新しい家族には強いられないだろう。

「飯舘村が次の世代にもつながるかどうかわからない。大きな問題だと思う。だから、いつかは僕も帰ります」

神社を守るのは簡単そうで難しい。それを突きつけるような事態が起きたのも飯舘村だった。

第11章 焼け落ちた村の神社

2013年4月1日未明。福島県飯舘村の綿津見神社から北西約6キロにある山津見（やまつみ）神社で、火の手が上がった。

背後の虎捕山（とらとりやま）の山頂にある本殿は無事だったが、1904（明治37）年造営の拝殿と社務所が全焼。宮司の妻（当時80）が亡くなった。

警報装置の発信で異常を知った警備会社から南相馬消防署に通報があり、消防車が出動。村内を見回っていた警察も現場へ急いだ。

しかし全村避難中で、村民が組織する消防団はほとんど誰もいない状態だった。消防車6台が駆けつけたが火の回りが早かったという。

「全部真っ黒になって焼け落ちるなんてなあ」

明け方になって避難先の福島市から駆けつけた、氏子をつぶやいた。

火災の原因はわかっていない。

ほとんど無人の状態が続いている村では、墓参りの時に線香をともしことも自粛するようになっていた。

しかし、火災を完全に防ぐことはできなかった。

山津見神社は、古くから村外にまで知られた神社だった。

約900年前、一帯を荒らしていた山賊を源氏の武将が退治しようとした。

なかなか成果が上がらなかったとき、山の神が武将の夢に現れて「賊を討つなら白いオオカミの足跡をたどれ」と告げた。

お告げ通り、賊は山中で見つかって倒された。その山が虎捕山で、武将が山の神に感謝して神社を創建したという。

威勢のいい神様で、商売繁盛、交通安全、安産、狩猟と、さまざまな御利益（ごりやく）の神社となった。

10月の秋祭りは、数キロ先から道路が渋滞するほど参拝者が近隣から集まる。

「マイカーになる前は、みんな自転車で山越えして。木炭バスで来た人もいた。3万人はいたかなあ」

伊達市の仮設住宅に住む氏子総代、菅野永徳（かんのながのり）（75）は懐かしむ。

そのにぎわいは、全村避難で途絶えた。

「でも参拝に来る人はいるからって、宮司の奥さんは毎日のように、福島市の仮設から通ってたんだ」

綿津見神社の宮司、多田宏（67）は思った。「やっぱり昼も夜も神社にいて、用心しないといけないな」

実は火事のひと月前、和歌山県から2人の研究者が山津見神社を訪れていた。ある文化財を撮影したいというのがあった。

第12章 オオカミの絵も焼失

2013年2月。

和歌山大の教授、加藤久美（かとうくみ）（54）と特任助教、サイモン・ワーン（58）が福島県飯舘村にある山津見神社を訪ねていた。

観光学部所属の2人は環境学や文化人類学を専攻し、ニホンオオカミの絶滅の過程を探っていた。

山津見神社では、拝殿の天井に237枚のオオカミの絵がはめられていた。1枚ずつ絵柄が違い、誰がいつ描いたかはわからない。文化財としての指定もされていなかった。

ただ、山の神の眷属（けんぞく）、お使いが白いオオカミだと信じられてきた。

よその神社ならこま犬が据えられている拝殿前にも、1対のオオカミの石彫が鎮座している。

加藤らはオオカミの話を全国各地を訪ねるうち、山津見神社の絵のことを知る。12年の末に訪ね、宮司の妻と出会った。

「古い建物なんで、雨漏りしてねえ」

そんな話を聞き、加藤とワーンは「老朽化が進む前にオオカミの絵を残したい」と、天井の絵の写真撮影を願いつた。

2カ月後、機材を抱えて神社を再訪する。カメラを天井に向けて1枚ずつ撮るのは、意外に骨が折れた。

ストロボをたくと光が乱反射して絵が鮮明にならない。自然光だけだと拝殿は暗すぎた。

試行錯誤しながらなんとか、すべての絵を撮影した。

「これで記録を残せるからね。安心してね」

加藤のひと言に、宮司の妻はうれしそうに笑った。

和歌山に帰ると加藤とワーンは写真を整理し、CD-ROMに焼いた。

「ようやく神社に届けられる」

そう思った日だった。

加藤は研究室でインターネットを検索しているうち、信じられないニュースを見つけた。

「山津見神社が全焼」

地元新聞のホームページだった。

加藤とワーンが撮った写真は、火災前の神社の文化財を知る重要な記録になった。

山津見神社は14年秋から、再建工事に入った。

2人の写真を元に絵を復元し、奉納しようという計画も進んでいる。

加藤は言う。

「ニホンオオカミは1905年を最後に絶滅したと考えられている。飯舘村の文化を同じように途絶えさせてはいけない」

第13章 樹齢100年のスギ伐採

福島県飯舘村の綿津見神社境内。拝殿の入り口のすぐそばに、樹齢100年は経ったスギの木があった。

高さ約20メートルで、幹回りはふた抱えほどありそうだった。

2014年4月初め。国の除染事業で派遣されたという土木業者数人が、事前調査にやってきた。

業者はこのスギの木を見るなり、宮司の多田宏（67）にこう言った。

「これは切れません」

スギは、拝殿の建物から1メートルも離れていないところに生えている。

拝殿は創建1200年を記念し、06年に建て替えたばかり。伐採が進んで大木が少なくなった、青森ヒバをふんだんに使った。

スギを倒す作業中に傷つけたら、とんでもないことになる。

業者は尻込みしてしまったのだ。

しかし、このスギには確実に放射性物質が降った。

切らずにいては、拝殿の汚染は解決しない。根本的に解決するには、やはり木を切るしかなさそうだ。

「もう待つてられねえ」

多田は氏子総代と相談し、自前で業者を頼み、切り倒すことにした。

4月26日から2日がかかり。高所作業車がスギの脇に横付けされ、高いところから順にチェーンソーで長さ2メートルほどの丸太にしていった。

拝殿は無傷だった。伐採費用は60万円余りかかった。

この一件で、多田は思い知った。

「除染はなかなか面倒だぞ」

環境省は、住宅地から20メートルまでの森林の除染を進めるとしている。

それ以上離れると、実施しても空間放射線量が減る効果は認められないという。

境内の放射線量を下げるには木を切った方がいい。だが「鎮守の森」だ。どこまで手を入れていいのか。

境内では秋から作業が本格化した。一の鳥居から約100メートル続くスギの木立や裏山は木が間引かれ、以前はこんもりとしていた林も見通しがよくなった。

多田は毎日、線量計で測り、様子を見守った。

「監督する方が忙しいな」

結局、毎時1・8～2マイクロシーベルトあった境内は、毎時0・5～0・7マイクロシーベルトになった。一定の効果はあったようだ。

ただ、多田自身が震災後、どれだけ被曝（ひばく）したかはわからなくなった。

「身につける線量計を村から借りてたんだけど、いじってるうち、表示がゼロになっちゃった」

第14章 見通し立たぬ賠償

福島県飯舘村では、古代から山あいになんと集落がつくられてきた。

そして、身近な自然を神として敬うようになった。祖先神もいる。

「亡くなった人は三十三回忌までは仏だが、それから先は神様としてまつるんだ」

綿津見神社の宮司、多田宏（67）はそう話す。

村の農家はほとんどが、神棚を設ける。大きいと幅数メートルになり、先祖をまつる神徒壇（しんとだん）や仏壇を伴う場合もある。

それが震災後の全村避難で、半ばうち捨てるしかなかった。

そんな状況が続いていた2014年10月、多田のもとへ背広姿の男性ふたりが訪ねてきた。

名刺には「東京電力福島復興本社」とあった。神道にからむ賠償について、相談したいのだと言う。

社務所の応接間に入ったふたりは賠償の方針案を説明した。

「神棚につきましては、減価償却の考え方で対応したいのですが」

多田はすろどく反応した。

「それは違う。承服しかねます」

神棚は先祖代々、営々と守り続けてきた。それを評価するのに、古くなるほど価値が下がる減価償却はそぐわないのではない。

ふたりは「検討します」と告げて引きあげた。

翌月、ふたりは再びやってきた。

「減価償却案は撤回します。定額方式を軸に検討します」

3カ月前の7月、県東部、浜通り地方の神社を中心に「福島県内神社原子力損害賠償対策委員会」ができていた。県神社庁の副庁長をつとめる多田が委員長になった。

しかし、東電側との交渉はあまり進んでいなかった。東電側が多田を訪ねてきたのが、事実上のスタートと言えた。

寺や檀家の場合、有志のグループと東電との交渉が進み、そこでは仏壇の賠償について合意していた。

1基あたり祭祀（さいし）料と手数料を含めて51万円の定額。それ以上高額な仏壇の場合は写真や領収証などから査定にゆだねることもできる。

それに比べると、神社の賠償問題はまだ見通しが立っていない。

原発事故の主な被災地である双葉郡の神社だけで19カ所。大小様々で、まとまった交渉は難しい。

「個別相談会みたいなものを開いて、それぞれに東電と話してもらうしかないか」

多田はそう考えている。

第15章 厄払いも村の外で

新年が明けたばかりの2015年1月3日。

福島県飯館村にある綿津見神社の宮司、多田宏（68）は福島市内のホテルに車で向かった。

村立飯館中学校の同窓会。そこに集まる数え年33歳を迎える女性たちに、厄払いの祈禱（きとう）をするためだ。

多田が到着するより早く、宴会場では、十数人の女性たちが神前のお供えの準備を始めていた。

ニンジン、ジャガイモ、カボチャ、大根、バナナ、パイナップル、グレープフルーツ……。

野菜や果物が三方（さんぼう）という木製の台に積まれていった。

多田は会場に着くと、代表の女性に玉串を供える作法を教えた。

榊（さかき）の枝をどちらの手に持つのか。しづさが難しく、「ええ、右？ 左？」と女性が戸惑うたび、周囲から笑い声が上がった。

正月らしい明るい空気が漂う。

震災前は宴会場ではなく、綿津見神社の拝殿で行っていた行事だ。

数え42歳で本厄の男性は今も神社でおはらいするが、女性は2013年から中学校の同窓会に合わせ、福島市で開くようにした。

放射線の影響を考えてのことだ。

「女性の33歳は、子どもを生み育てる年頃だからね」

この日集まった十数人の中にも、妊婦が数人いた。

準備が整うと、多田は祝詞（のりと）を唱え、女性たちの名前と住所を読み上げていった。

福島市、川俣町、南相馬市、宇都宮市、埼玉県春日部市、戸田市、東京都……。全村避難の最中で、村内の地名はひとつも出てこない。

祈りの間、頭を下げていた、坂本朝美（さかもとあさみ）（31）は高校卒業後、東京で消防士をしている。震災後、一度だけ村の実家に戻ったことがあった。

「誰も住んでいないので、家の奥に入るのが怖かった。放射能の影響がどうなるかもわからないし」

多田は儀式を終えると、一人ひとりに厄よけのお札を手渡した。

「女性の33歳は体調が変化して下り坂にさしかかる転換期。どうか今年一年無事に過ごせるようにご祈念申し上げます」

最後のあいさつで、多田はこう続けた。「飯館は除染中で、廃棄物の真つ黒な袋があちこちに山積みになっています。それが中間貯蔵施設に運ばれたら、たまには村に戻ってきてください」

プロメテウスの罠〔62〕宮司は残った

著 者 朝日新聞（小滝ちひろ）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2015年4月30日 WEB新書版発行

2015年12月31日 EPUB版発行

©2015 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86612-653-1

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2015年4月30日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。